



幼女と
トカゲ

川崎ゆきお

「トカゲが大の字になって寝ておった」

「暑いからでしょうか」

「死んでおるのかと思い、よく見ると、腹が動いておる。息をしておった」

「猫や犬は暑いとき、腹を出して寝ていますねえ。背中を下にして」

「冬でも電気毛布を出してやると、そこで寝よる。暑くなると、腹を出す。仰向けになって手足を伸ばしてな。しかし、トカゲがそんな姿になっておるのは、妙じゃ」

「腹が動いているので、死んではないのでしょ」

「蛇は8の字になると死んでおる」

「そうなんですか」

「それよりも、大の字になっておるトカゲは妙じゃ」

「イモリかヤモリと見間違えたんじゃないですか」

「ああ、それらはガラス窓にいるとき、腹が見えるのう。それではない。カナヘビでもない。あれはトカゲだ」

「何処で」

「夢のなかで」

「ああ」

「なんじゃろうなあ、この夢は、トカゲが大の字で寝ている夢とは」

「しかし、先生がそれを大の字で寝ていると解釈したわけでしょ。別の人なら、違う解釈かもしれませんよ」

「そうかもしれん。実は寝る前に」

「トカゲを見ましたか」

「いや、熱帯夜で寝苦しかった。いつもは腹を下にしたり、横になって寝ておるんじやが、これが暑い。私は天井を向いて腹を出して寝ることは希じゃ。寝る前はその姿勢だがな。寝癖というのがある。心臓を下にして横を向き、そのまま俯き加減になって朝まで寝る。が、そのスタイルが暑い暑い。それで、腹を下ではなく、背中を下にした。まあ、布団に入ったときは、その姿勢なのじやがな。そして、手足を伸ばした。それこそ大の字にな。手は万歳でもいい。これが楽だった。暑いときはこれがいい。どうしてこれまでこの年になるまで、気付かなかったんだろうねえ。その姿勢で朝まで寝たんじや。そこで見た夢が大の字で仰向けで寝ているトカゲじゃ」

「何となく分かりました」

「しかし、分からんのが、トカゲじゃ。どうして猫じゃ駄目なんだ。犬では。また別の動物では駄目なんじや。どうしてトカゲなんじや。トカゲなど最近見んぞ。もう何十年も見ておらん」

「トカゲに関しての思い出は」

「特にない。カナヘビを殺したことがある。子供の頃かな。この時代は蛙などもよく殺したなあ。悪いことをしたわい」

「それで、トカゲは」

「近所の小さな女の子、まだ三つぐらいかな。トカゲを手にしていた。トカゲをおもちゃにしていた。分からんのだらうなあ。気持ち悪いとか、そういうことが。その程度かな。トカゲの思い

出は」

「無邪気な幼女が、トカゲと重なり、無邪気なトカゲになったんじゃないですか。大の字になって寝るトカゲって、やはり不用心でしょ。その幼女のように」

「そう来るか」

「はい」

「他に思い当たらんので、そういうことにしておくか」

「はい」

了